穢れなき黎明卿は「ボ卿」を目指す為に奮闘するそうです

虚炉@失踪主

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何故か綺麗なボ卿は「ボンドルド」を目指すようですよ？

綺麗なボ卿って…見たくない？って事で書き始めました。（久しぶりに書くからガバガバ構文、キャラ崩壊、誤字等は許してくれなす）

主はメイドインアビス（アニメ版）１期、黎明、２期までちゃんと見たのでなるべく原作よりより（アニメ基準）で書きたいと思います。

あと本編では出てないオリジナル遺物が出てきたりするのでそこら辺はご注意して

ください。
感想お待ちしております、それではゆっくりしてくださいね。
２０２２／０９／１４　２０：２０：０１　タグに「キャラ崩壊」を追加しました。

目　次

「黎明卿」は「ボ卿」を目指すようです　1
「黎明卿」は「娘」を拾うそうです　11
「祈手」達は弟子を取ろうとする黎明卿を抑えるようです　17

「黎明卿」は「ボ卿」を目指すようです

「一体何処で間違えたのでしょうか…」

そう頭を悩ます1人の人物が居た。

彼の名は「ボンドルド」、この深淵より続く「アビス」と呼ばれた縦穴に住みし1人の探掘家の1人であり「白笛」と呼ばれた特別な笛を持った1人の超人であった。

そんな彼の正体は転生者と呼ばれた、1度死を経験した医者であった。そして彼自身「ボンドルド」と呼ばれたキャラクターのファンでもあった。

そんな彼なのだが、頭を悩ますことがあった。それは、「ボンドルド」と言うキャラクターになりきれてなかったと言う事なのだ。

実は彼は気づいていないが、彼の性格は超が着くほどの「聖人」体質であり、本来の「クズ」とはかけ離れた考えの持ち主であった。

それ故に原作が色々と可笑しくなっていた。

ボンドルドと言う人間は本来なら【精神隷属機（ゾアホリック）】。「遺物」と呼ばれたアビスの各層にある謎の物によって自身を増やしていたのだが…彼はとある遺物のせいで、不老不死、

つまり死ぬ事の無い人間となっている。
では、白笛と呼ばれた物は？「祈手（アンプラハンズ）」達は？
結論を言うと居るのだ。彼の優しさ「聖人」と呼ばれたその心に引かれた者達が集まり、「祈手」として彼に着いてきていた。また、白笛は彼を思った1人の祈手により生まれたのであった。
故に、彼はボンドルドとしての条件はあるが少し違った感じになっていた。そんな状況に彼は頭を悩ましていたのだ。
「仕方ありません、こんな状況ですが必ず彼になってみせます…」
そう志す彼は、「ボンドルド」を目指すのだったが、全くになれないのはこの先自覚する事になる。

「ふむ、あのエレベーターは一体どうなってますかね？」
私の名はボンボルド（つぽい人）、人は私を黎明卿と呼びます。そんな私ですが今は少し頭を悩ましていました。それは、メイドインアビス本編にて登場した「上昇負荷の呪いを片方に押し付けるエレベーター」。それは我々が「祝福」と呼ぶ人の理性、知識を持ちながら人間を超えて行った姿。
それを生み出す為に作ったのだが、今や「どんな人間でも上昇負荷を受けずに上がる

事ができるエレベーター」を作っている…祈手の人達が作り上げたのだが、現在は「片方に呪いをぶつければどうなるか?」と言う実験の為に試作しているエレベーターを作り上げていた。

彼らは知ることは無い「知識」を持っている私はこの先の結末を知っているが、「知識」を知らない彼らはこの実験の結末を知らないのだよ。故に、私は止めることはしない。これも「彼」になる為に…。

(本当のことを言うと胃がキリキリしてますね、はい)

「おーい、旦那〜!」

「おや、グェイラさん。一体どうされましたか?」

そう考えていると、少しドタドタと走る声が聞こえてきたのです。すると、祈手の1人である「グェイラ」さんが息を切らして走ってきました。

「大変だ!! ハァ…ナナチが居ない!!」

「それは…、まさか。グェイラさん、ナナチ以外の子が逃げてないか他の祈手達と共同して動いてください。私はナナチを探します!!」

まさか、こんな事態になるとは…

これも計算狂いになるとは思ってもいませんでしたよ…、私は確かにスラム街の子供達をこの「前線基地(イドフロント)」に連れて帰ってきました。

「彼」の様に人体実験を行う為です。ですが、結局は「アビスの中で子供達が過ごすと人体的に問題はあるのか」と言う謎の実験へと変わってしまいました。

そして、その中にも「ナナチ」の存在がいました。

嗚呼、可愛い…可愛いですよ。ナナチ……（）

勿論、ミーティも居ましたね…。まさか、ナナチが何処かへ行くなんて本当に恐ろしいですよ。

私の事をまだ信用しきってなかった…と、言うべきでしょうか?それは、彼自身にしか分かりませんが。

しかし、本当に居ませんね…まるでかくれんぼの様です。

「ナナチ、一体どこにいるのですか?早く姿を見せてください!!」

居ない、居ない、居ない。何処にもいない。

上昇負荷がかかるポイントにも居ない。つまりは、上昇負荷をかけずに動けれるポイントに居ると…。

後は……。

「ボンドルドさん!!」

私が走って探し、頭を悩ましている所に大きく響く様な声がした。

そう声をかけるのは、ミーティの声であった。

「ミーティ…貴方まで、一体何処へ？」
「大変なの！、ボンドルドさんが前に教えてくれたエレベーターにナナチが乗っちゃったの!!」
な、なんだっ…と？（素）

オイラは、ナナチ。
オイラはある日、いつもの様に生まれた、雪の降る極寒の土地・セレニで盗みや芸をすることもできず拾い物で生活していたんだが…アビスの白笛の1人である「ボンドルド」に勧誘されたんだ。
そうして来たこのアビスの深淵…「前線基地（イドフロント）」と呼ばれた、人間が人間のまま帰れる唯一の層に建てられた場所だとボンドルドは言った。
そんな中でオイラは彼女「ミーティ」と出会った。
オイラは彼女の夢を聞いた。それは「探検家」になると言う夢を。「白笛」になると言う夢を。
オイラはそんな彼女を手助けしたいと思ってしまった。
そんなある日、オイラはこっそりとみんなが居る所を抜け出してしまった。
この場所に来た子供達が少なくなっていってるから気になって…見てしまったんだ。

「大丈夫ですよ、シュフルム…大丈夫、麻酔をしますから…」
赤く焼け爛れて、皮膚が膨らみ、血を吐きかけている子供の1人を、それを切ろうとするボンボルドの姿が居た。
その日からオイラはボンドルドが怖くなった。
そして、オイラは逃げ出した、このアビスから出る為に。そん時に思い出したのはボンドルドのある言葉だった。
「この前線基地では、日々アビスの研究をしているのです。これもその実験の物です「上昇負荷」と呼ばれた上に上がると起こる謎の呪いのような現象…「アビスの呪い」と言われる物です。それを受けずに登ることができるエレベーターを我々は作っているのですよ。」
オイラは祈手と呼ばれた人達から隠れながらそのエレベーターへと向かった。二つあるエレベーター。
エレベーターの前にはレバーの様な物がありそれを前に倒し。乗り込んだんだ。
「ナナチ!!ダメ!!それに乗っちゃ!!」
ミーティの声が聞こえたが、その声は一瞬で遮られた。
エレベーターのドアが完璧に閉まってしまった。
「待ってて!!今すぐボンドルドさんを呼んでくるから!!」

オイラはこのエレベーターに乗ったことに1番後悔している。
この後何が起こるなんて知らずにボンドルドに悪意を向けてたんだがら。
そして、ボンドルドとミーティが走って来たんだ。
ボンドルドは焦る様に機械を触り始めたが、少しずつエレベーターが動いている事に気づいた。
すると、ボンドルドが横のエレベーターに入ったんだ。
「いいですか、ミーティ、ナナチ。このエレベーターはまだ未完成なんです。ナナチ、貴方を救う為に私を犠牲にしてでもこちらに乗ります。決して私の事を心配しないでください。」
訳が分からなかった。
「どう言う事なんだ?」
「このエレベーターは、「片方に呪いを押し付けたらどうなるか」と言う実験の為に作られた物です。危険すぎて廃棄する予定でしたが、まさか私が「呪いを受ける側」になるなんて。でも、心配しないでください私は白笛です。多少はなんとでもなります。だから、大丈夫…大丈夫ですよナナチ。私が苦しそうにしてても焦らないで…」
その言葉にオイラとミーティは顔が真っ青になったんだ。

そして、落ちて行った。
グラグラと揺れて落ちるそのエレベーターは、重力に押し潰されそうなほど強かった。
底に着くと、暗闇の中に落とされた…
そして、上へ引き戻されたんだ。
「大丈夫…大丈夫ですよ…ナナチ…大丈夫…」
声が歪んで聞こえるんだ、ボンドルドが苦しそうに悶えてるんだ。そしてオイラの体が可笑しくなっていた。
謎の毛が生えて、縦長い耳ができて…それから、考えるのができないほど混乱したんだ。ボンドルドが壊れた様に「大丈夫」と歪んだ声で言い続けて、そうして元の場所に着いた。
「ナ、ナナチ?」
「あ、あ、ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝!!　」
オイラは、泣いた。倒れたボンドルドを掴んで泣いたんだ。すると弱々しい声と、めいいっぱいの力でオイラの頭を撫で始めたんだ。
「だ…だい…じょうぶ…ですよ、ナ…ナナチ」
そう言うと途切れた様に力が無くなったんだ。

操り人形の糸が切れたように。
そうしてオイラは罪悪感を拭えず、ミーティと一緒に前線基地を飛び出した。ミーティは何も言わずに、オイラを抱きしめて一緒に来てくれた。
それからオイラは何も知らずに、とある場所で過ごしている。ボンボルドから貰った本を持って、怪我をした探検家達を治したりしている…ただ、あの時の罪悪感を拭えずに。

「旦那、体調はどうですか？」
「ええ、問題ありません。他の祈手達も迷惑をおかけしましたね」
ナナチが失踪して3日が経ち、私の身体は元に戻っていた。
第5層の呪いそれは「人ではなくなる」呪いを2人分受けたが人間の形を保ったまま、こうやって五体満足で生きていた。
それは、私の体にある特級遺物「永遠に絶えぬ者（アンリミテッドルーブズ）」と呼ばれた誰にも見せたことも無い特別な遺物が体内にあるから。その能力は「1度使うとその人間はアビスの呪いを受けず老いず死ぬ事を許されない」と言う物。でも、呪いを受けない代わりに肉体に反動が加わって身動きが出来なくなると言うデメリットもある物です。
しかし、大丈夫でしょうかナナチ達は…ですが、「彼」っぽい事はできたので、問題は

ありません。少し時が経てばナナチ達に会いに行きましょう…。

私達の話はまだ始まっていないのですから。

「黎明卿」は「娘」を拾うそうです

私の名はボンボルド、人は「黎明卿」と呼びます。
今は祈手さん達と共に、第5層の付近の遺物を収集しに来ました。多くの原生生物が住むこの第5層は沢山の危険があります…我々はそんな危険な場所を少しずつ進んでいるのです。
「ボンドルド様、大変です。子供が倒れています。」
「!?」
そんな中で「白色の少し毛が落ちた女の子」が1人倒れていた所を見つけたのです。
おや、おやおやおやおやおや…。
嗚呼、これも愛なのですね。やはり、愛です。愛ですよ…彼女もまた運命だったのですね…嗚呼、これも…。
「脈拍もあるそうです…まだ助けれるかも知れませんね、すぐに帰りましょう。」
はっ、危ない危ない…急いで帰りましょう。

「旦那、こりゃー…酷いですよ。皮膚は膨れ上がって、血はダラダラ。生きてるのが不思議な程ですよ…」

私達はすぐさまに前線基地に帰還し、待機していたグェイラさんとエイカさんと共に直ぐにオペを開始することにしました。

1度、上昇負荷による呪いなのか分からないですが、皮膚が膨らみ焼けただれている為、原生生物に咥えられて上昇負荷を受けた挙句何処かで放されて、雪の上で放置されたと言う考えが正しいでしょうか。

「グェイラ」

「…すみません」

「いいのです、では始めましょう。エイカさん、麻酔を」

私は、こう言う真面目な時は少し言葉を慎むようにさんづけを止めるのです、今は「患者」なのですから…命が消える前に、最前の手を尽くす。それが「医者」と言う者でしょう。

「大丈夫…大丈夫ですよ…貴方は強い。だからきっと…」

私は1人の少女を見据えた。

時間が経てば治るであろう、少女の膨らんだ顔に注射器を刺した。

【黎明卿、医療中…】

約４０分ぐらいで、治療は完了しましたね…原作では、多分ですが何日か、時間がかかっていましたが。

我々は今や「上昇負荷による負傷」を（精神的な部分以外は）完璧に治す事ができる医療方法を見つける事ができたのです。これを知る為に、亡くなった祈手の人達や多くの探検家の犠牲により見つかったこの方法はアビスの人達に広め、呪いの対策なども見つかっている。

（まぁ…あくまでも対策であって効くとは言っていませんがね。「自我を保つ」「吐き気を抑える」「痺れを無くす」などの本当のただの対策な、だけですけどね。）

実際に、それらを取り除くなら我々が作った医療品では完璧には取ることはできません。水キノコを傷口に入れるなら治ると思いますがね（苦笑）

手術を終えて、担架に乗せて行くのはとある部屋であった。ドアを開ければ、長い一本線の通路、ドアが複数ある…ドアの中を覗くのは、並ぶ担架に乗っかりすやすやと眠る子供達。それは「実験」、一部の場所で起こる「上昇負荷」によって負傷した子供達を癒す為に作り上げた場所です。

「ああ、そう言えば…この子にも名前を付けなければなりませんね…そうですね…「プル

シュカ」なんて、どうでしょうか？」
「旦那、その意味は？」
「「夜明けの花」…どうでしょうか？なかなかに良い名前かと思いますが…？」
「ふふ、確かに。旦那にしてはいい名前をつけたと思いますよ」
「」ウンウン
「私にしては…とは？」ニコニコ
「…」マッサオ「…」マッサオ
「ふふっ…いえ、冗談ですよ」

手術を終えて、約1週間ほど経ちました。
プルシュカの身体は傷が無いほど綺麗になりましたが、ここで問題が起こりました。それは、上昇負荷による自我の崩壊。原作でも起こることは承知で姿を見ておりましたが、他の子達と違い少し引きこもり体質になってしまいましたね。
部屋の角にある六角形の穴の中で、ハイライトの消えた目で私を見ています。嗚呼、その深淵覗くような眼も良いですね…
「旦那…って、ん？その生き物って「メイナストイリム」…」
「ええ、そうですよ。プルシュカ出てきなさい、貴方にプレゼントがあるのです」

そう私が言うと、少しづつ穴の入口から完璧に出たとは言いませんが私を覗いて見てきたのです。
「プルシュカ…貴方にプレゼントです。どうか受け取ってください、私の「娘」、可愛らしい私の娘に向けての、プレゼントを…この生き物は「メイナストイリム」名はまだ付けていません。きっと貴方の大切な仲間としてこの先を教えてくれるでしょう…」
私は彼女にその生き物をゆっくりと渡すと、彼女の目のハイライトが少し色が戻ってきました、夜明けの光る花のように。
プルシュカはメイナストイリムを弱々しく抱いて、私を見ました。そこには穴から完璧に出て立つプルシュカの姿を私に見せてくれたのです。
そんな姿に育児役のグェイラさんは、1人大興奮。
祈手の1人である彼の仮面の隙間から少し涙が出ていました。
「旦那…」
「おやおや、感動のあまり泣いてしまいましたね…、プルシュカこんな大人にはならない様に。」
「そんな酷いこと言わないでくださいよ…！」
「ふふっ…」
ふふ、おやおや、グェイラさんはからかいがいのある人ですね…貴方は、祈手の中で

も優しく、きっとプルシュカの心を癒してくれるでしょう。だから、どうかお願いします。そして…

「きっと、私が貴方に「夜明け」を見せてあげますね…」

私が必ず…

「旦那…なんか言いましたか？」ゴシゴシ

「いえ、なんにも。では、頼みますね…グェイラさん」

「祈手」達は弟子を取ろうとする黎明卿を抑えるようです

「～♪」

深界４層、「不屈の花園」と呼ばれた場所にて１人の祈手が花の手入れをしていた。それは、綺麗な景色だった。

【不屈の花】と別称がある「トコシエコウ」が周り一面を覆い尽くしていた。この花は、アビスのどこらかしこで見られる花。どんな地形だろうが、必ずしも生えていることから「不屈」の名を持つ花。

そんな、花を好んでいるこの祈手「ギャリケー」

見た目は白い外套を身にまとった普通に居る祈手だが、背中には火炎放射器を持ち原生生物を焼き殺して行くその姿から「灰のギャリケー」と言う名を持つ彼はおじいちゃんでもある。

いいや、正確にはこの「祈手」の中で最年長（ボンドルドを除く）であり、他の祈手達からはおじいちゃん扱いされている。そんな彼の役目はこの不屈の花園の手入れを担当していた。

そんなある日のこと。

「おやおや、ギャリケーさん。今日もお花が綺麗ですね」

1人の異様な雰囲気を纏う男が歩いてギャリケーの元へ来ていた。

「ボンドルド様。一体どうされましたか？わざわざこの「不屈の花園」へと足を運ばれるなんて」

黒一色に縦に紫に光る仮面を被った1人の男。

彼の名はボンドルド、この世界における「白笛」と呼ばれた超人の1人「黎明卿」と呼ばれた人間が居たのだ。

「トコシエコウの花を少し貰いに来たのですよ、トコシエコウによる匂いは深い層に存在する原生生物が反応する事が分かりました、もし他の植物だと反応しないのか…気になるのでその実験の為に。」

「そうでしたか、ではこちらを」

そう言うと、ギャリケーは何処からともかく取り出したトコシエコウの花が入った謎の保存ケースをボンドルドへと渡した。

「ええ、ありがとうございます。あ、そう言えばなんですが……」

「ん？どうされまし「最近、弟子を取ろうと思ってるのですが。どうでしょうかね？」

……!?」

哀れ、ボンドルド。その発言が周りを苦しめる事も知らずに。

「これから『第６８２回目探掘家「祈手」の長「ボンドルド」様についての会』を開始する」

前線基地（イドフロント）の一室、円状になっている机に揃う８人の祈手達。

その中でも適任と選ばれたボラによりこの会議の幕は落とされた。

「えっ…？えっ…？」

そこにはわけも分からず呼び出されて困惑する新米祈手の姿もあった。彼女の名はウィルコ、最近若いにも関わらず黒笛になりその素質を見込んでボンドルドが勧誘を促して入ってきた新米ちゃんである。

「ああ、そう言えばウィルコちゃんはこの会議に参加するの初めてだったね」

まだ心が回復しきってないプルシュカを膝に乗せてニコニコと笑みを浮かべながらこの会議の全貌を話し出すグェイラ。

「この会議は、初代祈手メンバーから長く続く、旦那……黎明卿「ボンドルド」について最近の変化などを語る会議だね、俗に言うとファンクラブっぽい事をしてるんだよ」

そう言うグェイラにウィルコ以外の祈手達がウンウンと頷く。

「で、今回の問題についてだ。ギャリケーさん話さないといけないことがあるんだろ？」

そう言うグェイラに立ち上がっては深刻な表情（？）でギャリケーは話し始めたのである。

「……はい、私だけが多分知っているのですが、この間私の担当地域である第４層の「不屈の花園」そこにボンドルド様が実験の為、トコシエソウの花を回収しに来ました。そん時に放った発言です「弟子を取ろうと思ってるのですが…」と」

『!?』「……???」

その発言によって、議会は大いに荒れた。

新米のウィルコに関しては不思議そうに首を傾けて、頭に「???」の文字が着くほどに。

グェイラは、プルシュカが膝に居たため謎の葛藤が起きていた。

一方、他の祈手達は大狂乱、冷静そうに身を保っているが後ろの２本のアームがガタガタと震える祈手（ストゥーマー）や、司会役でもあるボラでさえプルプルと震えていた。他の祈手達も、眉間にシワを寄せるほど深刻な顔（？）をしていたのだ。

「今回はそれに対して、ボンドルド様が「弟子を取る事を拒否するか賛成するか」多数決で決めようと思う。」

まぁその決着は、ボンドルド本人が参戦して決まったと言う…

一方、そんな事も知らない哀れなホンドルドと言うと……。
「くぁｗ背ｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：「」」
何故かバグっていた。
彼は「黎明卿」この深淵（アビス）において最前線をたち続ける白笛最強格の１人であり、また彼は研究者なのだから色んな事を見つければ、考え、観察して、絵に残し、また観察して、作り出す。彼は理系の呪いに今もなお苦しめられているのであった。
「はぁ…はぁ…ダメだ、アビスの呪いに耐えれる生物でカートリッジの代わりを作ろうと言う発想がダメなのか…？或いは、原生生物の中でもアビスの呪いを受ける生き物を探さなければならないのか…？」
１人つぶやく彼は、空を見つめる。
前線基地の明かりへ目を向けて、飛ぶ小バエ達を追う。
人として、この深淵の謎を解く為に１人、彼は頭を悩ます。祈手達がギャアギャア言っている時には彼は本当に心を苦しそうに顔を歪めて悩む。
彼は孤独であった。
「はぁ…いえ、考えても仕方ありません。探しましょう。これも私と言う人間の為です…「彼」の様には、成れないかも知れませんが私は必ず私のやり方で彼に近づきます。必ず…」

彼の心には1つの決心と祈手と言う仲間たちを燃料にして動き始めた。それが彼が唯一、孤独と戦える所以なのだから。

前線基地の中をぐるぐると彼は回り始めた。

新たな発見を見つける仲間たちを呼ぶ為にと。

しかし、至る所を回るが祈手達が居ない事を気づいてしまった。

「そういえば…今日は皆さん休日(オフの日)でしたね…仕方ありません、なら1人で…ん?おや、こんな所に部屋なんかありましたか…?」

1人探検に行こうと思っていた矢先、壁似合う様にカモフラージュされた扉が開いておりその隙間からは、光が。

彼は、この前線基地の主としてその扉の先を探索し始めたのであった。

その先に映ったのは…

「神々しきボンドルド様に、赤子同然の赤笛の弟子を取るだと!?そんなことは断じて認めん!!」

「アア、ソレニ関シテハ同感ダ」

中華テーブルのような真ん丸な机を囲むように座る彼ら、祈手達であった。彼はこっそりと隠れながらその様子を確認する事にしたのである。

「ですが、それだとボンドルド様の意見を無視してしまう事になってしまいますが…」

「うむぅ…」
「ええ、そうですよ？」
『!?』
　しかし彼はうずうずが止まらなくなり出てきてしまった。未知なる物に対して興味津々な研究者ならではの性が出てしまったのである。
「それで、私が『弟子を取る』と言う発言をした事について語っていましたが…私は今の内は弟子を取る気はありませんよ。今はプルシュカや貴方達祈手を愛でる事が最優先事項なのですから。」
　おお、神よ。この優しき者に感謝を。
　と、言わんばかりに神々しく見えるボンドルドの姿を見た祈手達は椅子から飛び出しては土下座をして崇め始めた。
　その様子を見るグェイラとウィルコ、彼彼女は心の中でこう思っただろう。
（（この人まじで神様じゃん））
　と。